教職大学院の「講義」をどう展開するか

教職実践開発専修　　有　村　久　春

１．教育専門職の養成の視点から

本稿を作成するに当たり，改めて「設置の趣旨等を記載した書類」（文部科学省への申請書類）を紐解いてみた。教職大学院設置の趣旨を理解し直すとともに，それに応える授業展開であったかを自分自身に問い掛ける意図からである。また，授業省察の拠り所を得るためでもある。

その理念・目的には，「新設する本専攻では，学校現場の実践や開発に即戦力として貢献する高度な教育専門職を養成する。（中略）教職大学院では，地域や学校の社会的ニーズすなわち岐阜県の学校教育全体の活性化や学校組織の改善ニーズに応じて，地域や学校に役立つ高度な教育専門職を輩出することを目的とする」と記し，現場の実践を活かした教材の開発，学校全体の活性化を目指した組織改善など，教育専門職（スクールリーダー）としての高度な力量を養成することとしている。また，この目的達成のための教育方法を示した「授業の工夫」の項においても，「本専攻の授業全体では，実践技法の習得のための「講義」とその技法の検証と開発のための実践的な「演習」の両方を組み合わせた授業の工夫を行う。特に，「演習」指導の部分では，コホートを活用したケースメソッドを導入することを工夫する」と記し，講義と演習を組み合わせた授業の工夫，そして学生の学習実態（教職経験や年代別など）を踏まえた授業展開を求めている。

これらの記述を理解したうえで，次の事項に留意した授業を試みている。

①　現職派遣教員が２／３を占める実態から，教育活動の「実践」と「開発」に重点を置く。

②　ストレートマスターの学部での学びを活かした教育理念を具体化する。

③　これまでの学習や研究の経験を，相互に意見交流できる場を設定する。

④　実践・開発の裏付けとなる学問的な背景や論理を討論する場を設定する。

以下，具体例をもとに述べる。取り上げる授業例は，「学級経営の理論と実践」（前期必修科目：受講者23名・内１名は体育学専攻の院生）と，「特別活動の開発実践」（後期選択科目：受講者10名・派遣教員６名，ストレートマスター４名）の２つである。

２．授業の目標設定を明らかにする

一般論から考えて，授業を行う際に目標を設定し，それを受講者に的確に伝えることは当然なことであり，教員としての基本である。それゆえ，この営みがどのように為されるかが，受講者と教員の授業に対する満足度を左右する。教育の方法論からして，論議の余地はないと思う。以下に，担当する２つの場合を示す。

例：「学級経営の理論と実践」
- 学級経営の意義を論議する
- 学校教育での位置づけを検討する
- 「私の学級経営」を構想する
- 学級経営の内容を実践的に考察する
- 学級経営論の三つの潮流を検討する
- 学級経営の実際に触れる（学校参観）

例：「特別活動の開発実践」
- 特別活動の実践上の課題を把握する
- 理想の特別活動論を構想する
- 学習指導要領の変遷を検討する
- 文献から、集団論を学ぶ
- 学級教師論を学ぶ
- 自らの開発実践例を発表する

特に，この２つの授業で心掛けたことは，15回のプロセスにストーリー性をもたせ，受講者自身が学びの中で目標を変革させ，その自己達成を援助することを目的としたことである。第1回目の授業で，授業の目的や15回のスケジュールを説明する中で，上記の内容を授業の具体目標として提示した。受講者が一読して，何をどのように学ぶのか，自らが学習プランを立案しやすいような文言にするようにした。

例えば,「学校教育での位置づけを検討する」の目標では,「位置付け」の言葉から学級経営の学校教育における位置を想定するであろうし,そこでの関係性を考えようとするであろう。また,「検討する」の言葉から自分なりの思考を深め，それをグループで話し合う，他者に伝えるなどの学習行動を自ら構想するであろう。

このような目標観については，授業者としての私の考えや論理が先行することも少なくない。ときには,受講者への押し付けになることも考えられる。これらの意味から,目標提示に際して,「この目標（言葉）からどのような学習や研究が可能なのか，その方向性が見立てられるのか」を受講者に問うこととし，授業者としての行き過ぎや迷いを受講者とともにチェックする必要がある。授業における目標の一貫性及び修正・転換の柔軟性の観点からも，授業展開のプロセスにこれらの機能が適時適切に作用することが重要であると考える。

３．授業の構想・形態を工夫する

教職大学院の趣旨から考えて，授業の目標を具体化するための授業構想やその形態をどのように展開するのか，本稿の重要な課題とするところである。「授業展開」と称される営みは，いずれの校種・教育機関においても多種多様に研究開発されている。授業者・教員としての生き甲斐とも言える部分であるからである。科目の特性や単位等の評価・認定の在り方とも連関して，授業者が常に工夫・改善しなければならない問題であると考えている。

一般論としては，＜受講者・学生と一緒に授業の営みを創る＞との考えが望ましい。本学の教職大学院では,派遣教員とストレートマスターが同じ空間で学ぶことが大半である。したがって,より一層授業の構想と形態を考え，学生たちにもその営みを具体的に提案しながら進める必要がある。本稿で取り上げた授業例では，図１のような展開過程によって実施している。

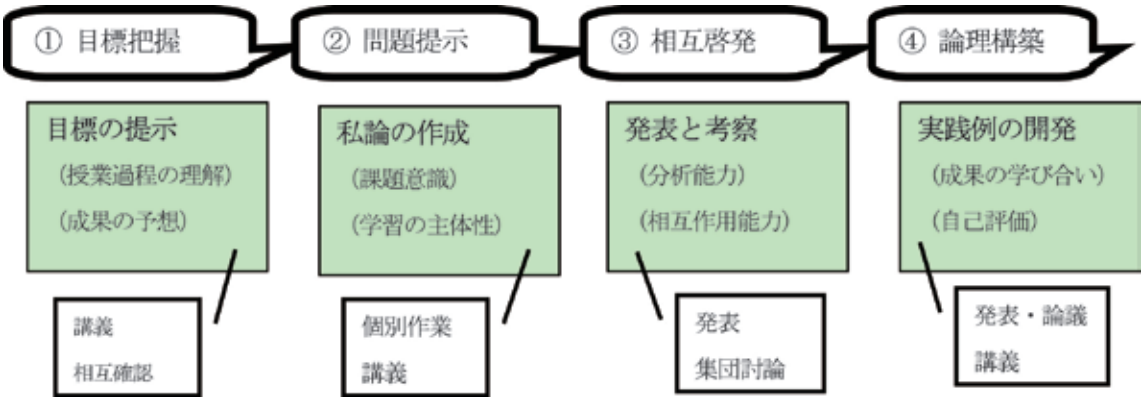

図１　授業の展開過程

（1）時間的な配分

このような授業展開は，15回を通した全体的な構想でもあるが，１コマのうちにおいても心得て実施している展開である。時間的な配分としては，前者の場合およそ①で１～３回，②で３～６回，③で６～12回，④で12～15回となろう。また，後者では①に10分程度，②に30分程度，③に30分程度，④に20分程度となろう。この営みに，「講義」と「演習」を適切に取り合わせることを工夫している（勿論，すべての授業コマにおいてこの配分とは言い切れない）。

（2）ステップ（過程）ごとの展開

まず，①のステップでは，授業目標の提示とともにそのおよその過程を理解しながら，学習の見当・成果を予測することである。２つの授業例では，「学級経営の意義」，「特別活動の実践上の課題」について講義を中心に展開した。そして，とりわけ派遣教員の院生から，これまでの実践例を具体的に提案しもらい，私の考えとあわせて目標の相互確認を行うように努めた。

それ以降のステップについて，学級経営の授業例をもとに簡単に説明すると，②では「学級経営：私の構想」と題して，Ａ４版１枚程度に学級経営の理想像を描く作業を行い，それを発表し，学習課題への意識付けを図ることとした。③では，学級経営の内容やその理論（三つの潮流）から学級経営の考え方･在り方を個人と小グループで分析し，そこでの集団討論に学ぶこととした。そして，④では岐阜大学附属小･中学校の学級経営の実態（研究発表会への参加）に学びながら，自らの学級経営論を構想し，Ａ４版１～２枚程度にまとめ，発表することとした。

（3）１コマの展開例

また，1コマの授業展開における「講義」と「演習」の在り方を考えたい。

例えば，「学校教育での位置づけを検討する」（学級経営の授業）との目標を授業の中で具体化する場面では，図２のような「学級経営」「学校経営」「学年経営」の３つの経営の相関図を提示した。

その論点として，「←――→」にどのような関係性が位置付けられるのかを，まず個人で思考し，つぎに３人グループで話し合い，その論議結果を全体で討論した。そこでは，学級経営から学年経営には「教材・資料の提供」「問題行動の連絡・報告」などが，学級経営から学校経営には「学級経営案の提出」「保護者対応への助言要請」などが必要であるとして，実例を交えた具体的な意見交換がみられた。

これらを踏まえて，その実例の一つ一つが教育目標の実現に資することを経営論の立場（教育課程運営の基本，組織の活性化，教員個々の成長など）から講義した。

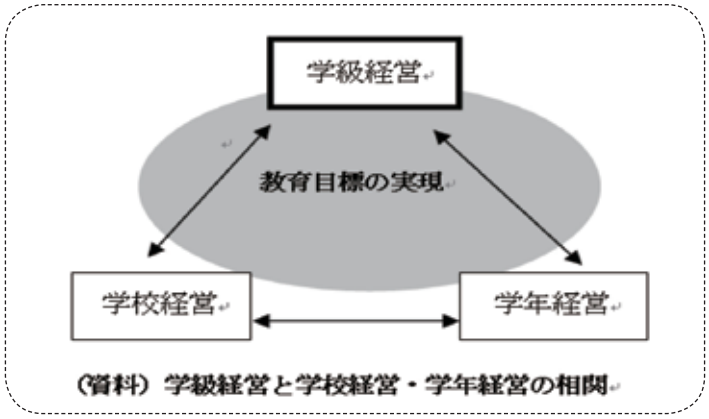

図２　３つの経営の相関

（4）実践例の開発と発表

受講者が，講義や演習等から学んだ成果を発表する授業展開を行うため，次ページの資料に示すような計画案を提示した。ここでは，「理想の特別活動論を構想する」（特別活動の授業）との目標を具体化する学び・研究の方法例を示すことにした。

受講者にとって，「計画→実践例開発→発表→評価」の一連の授業プロセスを早い段階で見立てることが重要であると考えている。そのうえで，主体的な授業参画を促す意図から，課題レポート作成（①～⑤）を求めた。この積み重ねを経て，自らの実践例の開発と発表の場を構成した。例えば，「学級活動にライフスキル教育を取り込む（小学校：学級活動）」，「Arts and Craft Day（高校：学校行事）」，「伝承遊びの経験プログラム（中学校：学級活動）」など独創的な発表がみられた（詳細略）。

＊

以上，ささやかな講義例を示したが，課題も山積している。例えば，①現職派遣とストレートマスターの学び合い・相互啓発をどのように機能させるのか（現状では実践的経験知の違いが大である。このよさを生かす必要もある），②理論と実践のバランスをどのように融合させるか（文献研究による論理的な論議を重ねる必要がある。文献講読等の授業も考えたい），③授業構成に関して講義と演習等のバランスをどのように調整するか（90分のなかではどちらかに偏りすぎる傾向にある。必要に応じて180分の構成も考えたい）などである。当然のことであるが，院生と教員との意思の疎通を図り，個々の課題や研究内容に関する相談等も充実させる必要がある。

（資料）

1　授業過程（案）　―　特別活動の研究開発実践に向けて

授業回	授業内容	備考（形態，課題等）
①	特別活動の課題把握	体験にもとづく提案と話し合い
②③	実践課題にもとづく「私的特別活動論」	グループ討論，講義　　レポート作成①
④⑤	学習指導要領の内容検討（私論との比較）	学習指導要領の読み取り，講義
⑥	特別活動の内容と教育論（その変遷①）	変遷と教育論に学ぶ　　レポート作成②
⑦⑧	特別活動の内容と教育論（その変遷②）	学習指導要領変遷の分析　レポート作成③
⑨	特別活動における集団論	文献からの学び，講義　　レポート作成④
⑩	集団論を踏まえた集団発達の過程	研究資料の実例からの学び，講義
⑪	特別活動における教師論	文献からの学び，講義　　レポート作成⑤
⑫⑬⑭	研究開発実践例の発表・討論①②③	開発例による発表・討論　発表資料作成
⑮	研究開発実践例の評価　授業のまとめ	まとめの講義

2　開発実践例の作成　―　特別活動の実践論を提案する

①　作成要領　　＊基本的に自由

・　A４版で，裏表１枚程度とする。

・　特別活動の内容及び校種を念頭におき，できるだけ具体的な活動例を開発する。

・　これまでの授業での学び（①～⑪）を参考に，その成果を活かす。

②　内容構成（例）

・(氏名等)　　・活動名（題材名）　　・指導目標　　・活動内容

・期待される活動の成果　　・開発のポイント　　・考察及び提言

③　その他

・　発表会前に作成を完了し，メンバー各人に配布する。

（＊１／14（水）までには，メンバー全員に配布しておいてください。）

3　発表会の実施　―　相互の開発例の学ぶ

①　実施方法

・　一人20分以内（発表10分，質疑８分）

・　司会者による進行，活発な意見交換・討論　（簡単なコメント：有村）

・　記録者は，意見交換等を記録し，それを後日，発表者にメール送信する（cc；有村）

②　発表者及び役割分担

発表日	発表者（　）・記録者【　】	司会者	備考
	（　）（　）（　）　【　】【　】【　】	（　）	

③　発表・討論の評価